

平成 30 年 2 月 9 日（金）

ないじえる芸術共創ラボ 古典インタプリタ日誌 山村浩二さん WS 鳴子イベントに向けて

1、山村浩二さん5回目のご来館

2月9日（金）、山村さんが来館されました。

3月9日の鳴子温泉でのイベントでは、このプロジェクトで進め
ておられるアニメーション作品創作について、当館の資料を交えな
がらお話いただくことになっています。

2、制作中のアニメーション作品

山村さんは「日本古典籍における夢見表現と描画表現」をテーマ
として、このプロジェクトに取り組んでおられ、日本古代、中世の夢
のあり方の基礎知識を基に、^{くわがたけいさい} 鋏形蕙 斎 が鳥獣に重なって世界の共同
体となる夢を見るというストーリーを創作し、映像化しておられま
す¹。「江戸期から近代にかけて失われていった共有体験としての夢
の可能性は、一部の人々、とくに感受性の鋭い芸術家の中には生き
ている。また動物の世界は、原始的な意識の世界があり、人々が失っ

¹ これまでの流れ：昔の日本では、夢は他者と共有されるものだった
というとらえ方に、日本のアイデンティティを見いだそうとして
おられます。また、近世後期の画師・鋏形蕙斎の描く略画につい
て、画家の視点から関心をもっておられます。（12/21 参照）

た感性を回復させてくれるのではないのでしょうか？」というのは、
山村さんのお言葉です。

今回は、上田秋成『雨月物語』に収められている「夢応の鯉魚」（図
1）²という作品をベースに、主人公の絵の名手である興義を鋏形蕙
斎に代えた自伝風フィクションになるそうです。



【図1】

² 興義という絵を描くことに秀でた僧は、ときに鯉となって遊ぶ夢
を見、起きると鯉を生き活きと絵に描き「夢応の鯉魚」と呼んでい
た。ある時鯉となって水中を旅し、人間に食べられそうになった時
に目が覚め、夢と悟る。請求記号：99-132-1~2。

平成 30 年 2 月 9 日（金）

現在うかがっているアニメーションのあらすじは、以下のとおりです。

鍬形蕙斎紹真（北尾 ^{まさよし} 政美）は日頃から鳥獣を観察している。観察しながら、自分と鳥獣を一体化して妄想の世界に入り、様々な鳥獣に自分が同化する。同化することで、動物たちの所作を生き生きと描くことができる。

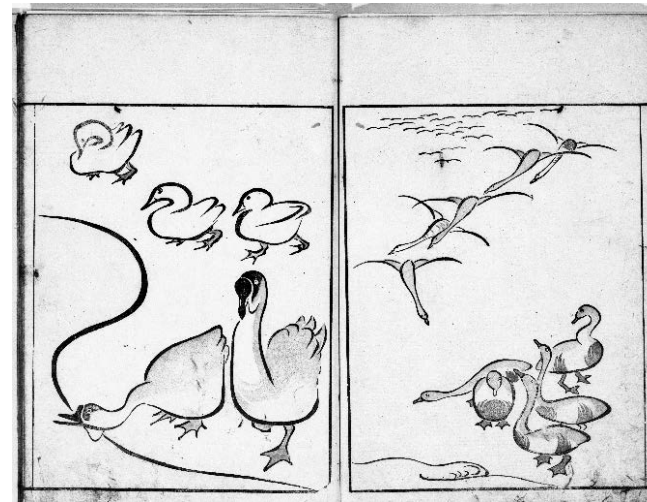
ある時、鯉になる夢を見た蕙斎は、漁夫に釣られ、自分のお抱えの津山藩の城内の台所に運ばれる。いくら叫んでも、誰も助けてくれず、まな板の上で切られそうになったところで、目が覚める。慌てて台所に駆けつけると、まさに大きな鯉が捌かれる寸前で、すぐに止に入る。夢の話をして、その鯉を貰い受けると、蕙斎はその鯉を池に放った。蕙斎の机には、描いたはずの鯉が消えてしまった紙が残っていた。

このストーリーで重要なモチーフのひとつが、蕙斎の描く鳥獣ですが、これらは当館でご覧になった『鳥獣略画式』（図 2）³がアイデアの源となっています。

山村さんがこの資料をご覧になった時、そのタッチや形の捉え方

について画家の視点から様々なコメントをくださり、私たち教員にとって大変興味深かったのを覚えています。

今回いただいたあらすじにも、鳥獣を良く観察している蕙斎の姿が描かれており、資料を見ながらお話したことが、このように形になってゆくのか！と興奮しました。



【図 2】

³ 11 月 30 日の日誌にも登場した作品。請求記号：ヤ 8-127。

平成 30 年 2 月 9 日（金）

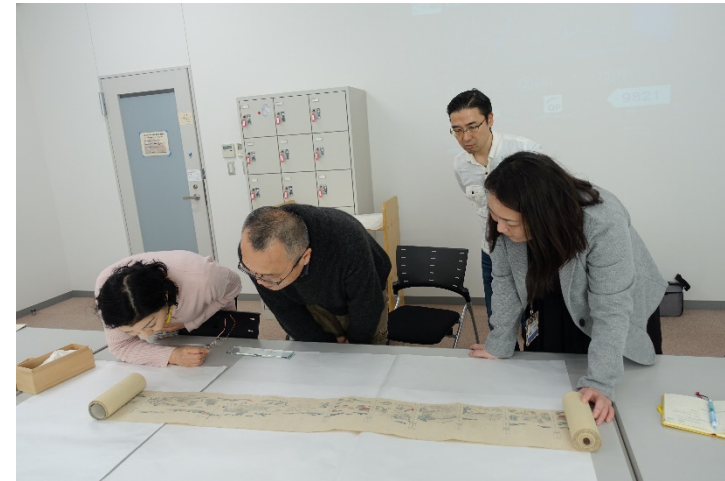
3, 鳴子イベントに向けて

さて、冒頭にも書いた鳴子温泉でのイベントの準備の一環として、本日は当館に所蔵されている鋏形蕙斎の様々な作品をご覧いただき、山下則子先生（当館教授）と木越俊介先生（准教授）よりレクチャーが行われました。

特に蕙斎の「江都／名所図会」⁴（刊・卷子）は圧巻で、江戸の風景が、淡い色彩で以て俯瞰で描かれています。

山村氏は、絵のタッチに注目しておられ、蕙斎の描く山などにボリューム感があること、表面の質感のタッチに秀でた北斎の描き方とは違う印象を受けることを話しておられました。

このような、資料をご覧になったときの捉え方がとても興味深く、イベントで披露してくださるのが楽しみです。



⁴ 請求記号：99-173。貴重書。